

83 『内経抜書』と『内経病機撮要弁証』における修辭法

吉川 澄美

東京都

『黄帝内経』の経文を抜粋し再編した『内経抜書』は、『続医学至要鈔』内に記述されるように味岡三伯一門のいわゆる三蔵伝授の際に教材の一つとして使われたと考えられる。関連文書として、写字台文庫所蔵・松岡玄達筆の『内経抜書私鈔』、岩瀬文庫所蔵『内経抜書』、内閣文庫所蔵『内経抜書』(195-76・81)などあり、また『内経病機撮要』(元禄十年刊)それに訓解を施した『内経病機撮要弁証』(宝永四年刊)も合わせて当時の講義内容を知る上で貴重な資料だと見なせる。典型的な構成は1)薬物治療の基本原則を説く「治法」、2)中焦穀府・附營衛、下焦精藏、上焦神藏を元にした生理学的・病理学的内容としての「三蔵」、そして3)14の病門を挙げて解説する「疾病」の3部門から成り立つ。いずれも、『黄帝内経』からの「要語」と関連づけた論述が大半を占めるが、「疾病」の各病門と三蔵それぞれに対しては概論も添えられている。構成順は文書ごとに若干異なり、『内経抜書』と名付けられた文書は「治法」から始まり、『病機撮要』は「三蔵」から始まる。また、岩瀬文庫のものは「治法」の一部と「疾病」のみから成り立つ。同じ教材を使っても、講義者によっても時期によっても異なり、さらに筆録者も異なるので文書間の相違は当然だろう。しかし横断的にこれらの文書に分析を加える事は学派の特質、あるいは当時の医学教育の一端を知る上でも有意義だと考える。方法として修辭学的側面に着目するのは個々の文章の違いというマイクロレベルの比較に留まらず、統辞や文章構成の型として、さらには説得の技法として捉える事で伝授のスタイルや思考パターンが垣間見えるのではないかと考えるからである。殊に味岡三伯、浅井周伯、井原道閑、小川朔庵らは「医学講説人」として『良医名鑑』に名を連ねて素靈の講義を得意としたのだから、一門に伝わる医学講説として一体どのような工夫があったのか、その修辭学的側面を知ることは意味ある事であろう。

一般的に講義では重要ポイントを効果的に提示する事が期待されるはずである。程度の差はあるが、いずれも網羅的に解説するというよりも、全般に抑揚のある文体となっている。例えば疾病の各概論では議論すべき問題点を挙げ、その是非の論評を加えながら結論を導く論法の痕跡が伺える。具体的には「中風の半身不随の左右の分」「痢疾の赤白と気血の分」「静にして得たるを中暑と曰うを論ず」のような漢籍を踏まえたものが散見する。また白黒の判定を明快に導く論のみでなく、問題点や誤りを指摘して聴講者の注意を惹いておきながら、結論としては必ずしも間違いではない、という妥協に落とし込む方法もある。医書ごとの解釈の食い違いやズレについては議論の余地を認めながらも、一步離れて臨床的な実用性を優先するならば大差なしとする達観した物言いや、却って「面白し」として評価を下す態度は入門者たちにとっては目から鱗が落ちるような体験だったのかもしれない。

また譬喩においても特筆すべき点がある。例えば、膈咽では胃の上口の「燥」が係って飲食物を吐き出してしまふ、という因果関係を説明する際に「譬えば塗物のぬれたるに飯を入れたる時は少しも底につかず乾きたる器に入れば下について離れざるが如し」(岩瀬文庫)と譬えている。また、半夏の効果について「半夏を用いるはその処で直に乾かして取たものなり。譬えていふに水が畳の上などにこぼれたを紙などを以てしめてとるの類なり」(写字台文庫)と添えている。これらは天人相関の伝統的中医学の譬喩でもなく、ましてや張景岳が得意とする兵法や治国の格調高い譬喩でもなく、そのかわりに誰でも試せる小さな体験的な事柄へなぞらえたものである。塗物の器や畳というような江戸時代の生活空間に密着した物を登場させ、尚且つ自らの行為によって確認できる事象であり、それらは一方で、ありきたりの日常生活にくまなく行き渡っている真理を写した事象でもある。このような生活臭漂う譬喩は聴講者にとっては現実感を伴って受けとめられ、結果として講義における説得力を増していると考えられる。